一銭銅貨

小川未明

青空文庫

英ちゃんは、お姉さんから、お古の財布をもらいました。そして、お母さんから、小遣いをいただくと、その中にいれておきましたが、じきに、つかってしまうので、その財布の中は、いつもからっぽでありました。

ある日、英ちゃんが、その財布を、ばたばたやっていると、お姉さんがごらんになって、

「英ちゃんの、財布の中は、いつもからっぽなのね。」と、笑いながらおっしゃいました。

「からっぽなもんか、そら、ごらんよ。はいっているだろう。」と、英ちゃんは、お金をつまんで見せました。

「たった、一銭きりしかないの？」

「姉さんは、この銅貨が、いつできたと思ってるの。そりや、古いんだから。」

「そうね、大きいから、大正か、明治にちがいないわ。」

「明治九年なんだぜ。まだ、うちのお父さんもお母さんも、生まれない前のだよ。その時分から、日本じゅうをぐるぐるまわっていたんだ。そう思って、僕、大事にしているのさ。」と、英ちゃんは、いまのから見ると、大形な、そして、手ずれのした、一銭銅貨を裏表を返しながら、さもなつかしそうにながめていました。

「まあ、そんなに、古いの。」と、お姉さんも、手にとって、ながめました。

「いろいろの人の手に渡ってきたんだね。」

「それは、そうよ。英ちゃんは、どんな人の手に、このおあしが渡ってきたと思うの。」

「大人や、子供や、金持ちや、貧乏人……。」

「もっと、いってごらんなさい。」

「船にも乗ったろうし、汽車にも乗ったろうし、新聞売りの手にも渡ったろうし、バッチンの穴の中へも入ったろうし、紙芝居のおじさんの手にも、そのほか考えたら、まだいろいろあるだろう。」

「だけど、海や、河の中に沈んだり、火の中へはいって、焼けてしまったら、もうこうして、このお金はなかったんですよ。」と、お姉さんは、おっしゃいました。それに、ちがいないと、英ちゃんは、思ったが、

「畳の間や、火鉢の灰の中に、落ちたことはあったかもしれないよ。」といいました。

「英ちゃんは、このお金をつかわないつもり。」と、姉さんは、おききになりました。

「僕、大事にして、しまっておくのだ。」

英ちゃんは、財布をばたばたやりながら、あちらへいってしまいました。

その晩、英ちゃんは、財布をまくらもとに置いて、寝たら、夢を見ました。

「坊ちゃん、私たちも、人間と同じように、一代のうちに、悲しいこともあれば、うれしいこともあります。大事に取り扱われればうれしいし、粗末にとりあつかわれればいい気持ちはいたしません。ひとつ身にしみて、忘れられないお話をいたしましょうか。」と、一銭銅貨が、いいました。

「ああ、きかして、おくれ。」と、英ちゃんは、答えました。

まだ、早い春の寒い夜のことでありました。その晩も、だんだん

ふけて、もう街は戸をしめて、電車に乗っている人も少なかったのです。

ゴウ、ガタン、ゴウ、ガタンといって、電車は走っていました。ある停留所で、ちょっとまるとみすぼらしい、腰の曲がったおじいさんが、つえをついて、電車にのりました。

「このおじいさんは、こんなふうをして、いま時分どこへいくのだろう。」と、乗っていた人たちは心のうちで思ったのです。

が、おじいさんが、腰をかけるのを見てから、車掌さんは、チン、チンとベルを鳴らしました。そして、おじいさんの前へきて、

「おじいさん、どこまでですか。」と、切符を切ろうとしました。

おじいさんは、がまぐちを振って、ありたけの銭を車掌にやりました。車掌は、よくかんじょうしてみました。

「おじいさん、一銭足りませんよ。」といいました。

「私は、あると思ったが、まけてはくださるまいのう。」と、おじいさんはいいました。

「規則ですから、おまけすることはできません。」と、車掌は、答えて、おじいさんのようすを見守っていました。

あわれなおじいさんは、このとき、つえをついて立ち上がりました。そして、電車から降りるため出ていこうとしました。

「おじいさん、一銭足らないのは私があげます。」といって、車掌さんは、自分のがまぐちから一銭銅貨を出して、おじいさんにやりました。

おじいさんは、心からありがたく思って、そのお金をいただきました。

「坊ちゃん、そのときの、一銭銅貨が、私なんですよ。」と、銅貨が、いいました。

「それから、おじいさんは、どうしたい。」と、英ちゃんが、たずねたときに、目がさめたのであります。

学校から帰ると、英ちゃんは、お母さんから、八銭おあしをいただいて、たこを買いにいきました。十銭出すと、とても、いいのが買えるのです。

「おじさん、これをば八銭に、おまけしてくれない。」と、英ちゃんは、いってみました。

「坊ちゃんだから、九銭にまけておきますよ。ほかの子でしたら、おまけしません。」と、答えました。英ちゃんは、どうしようかと考えましたが、とうとう、財布を空っぽにして、大事な一銭銅貨をやってしまいました。そのとき、

「かわいそうだな。」と、英ちゃんがいうと、

「私は、しまっておかれるよりか、旅をするほうが好きです。」と、銅貨は、ちかりと笑って、ほかのお友だちといっしょに、箱の中へはいっていきました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　13」講談社
　1977（昭和52）年11月10日第1刷発行
　1983（昭和58）年1月19日第5刷発行
底本の親本：「亀の子と人形」フタバ書院
　1941（昭和16）年4月
初出：「週刊朝日　23巻17号」
　1933（昭和8）年4月2日
※表題は底本では、「一一銭《せん》銅貨《どうか》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2018年9月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一銭銅貨

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/